

令和3年度 天理高等学校第二部 学校運営評価

評価 A:きちんと取り組んでいる B:ほぼ取り組んでいる C:あまり取り組めていない D:全く取り組めていない

1. 重点目標と方策

	重点目標	目標達成の方策	評価	成果と課題 (○成果 △課題)
①	(信条教育への取り組み) 神恩感謝の念を心に抱き、働く喜びと学ぶ喜びを体得できる生徒を育てる。	学校参拝を真剣に取り組む。	A	○学年ごとの週1回ではあるが、神殿での学校参拝ができるようになり喜びを感じ、真剣に取り組んでいる。 ○教職員から挨拶を行うことで、多数の生徒からも挨拶をしようという意思がみられるようになった。 △生徒が自ら挨拶ができるように、現状に満足せずもっとも教職員からも声をかけ、お互いの意識向上に努める。 △直接登校が多く、遅刻をする生徒に対して指導を徹底していく必要がある。
		教職員から生徒への挨拶・声かけを行う。	A	
②	(生きる力を培う) 知性を磨き、徳分を伸ばし、心身ともに健康で自立した生徒を育てる。	基本的生活習慣を向上させる。	B	○生活習慣や礼儀について、特に寮生活や部活動によって徹底している。 ○集団生活をするにより、仲間の大切さや協調性が培われ、生きる力が育まれている。 ○時間をかけ教材研究を深めることができた授業はより良い授業ができた実感した。さらに導入された電子黒板も大いに活用していきたい。 △コロナ禍のため、全体で集合する機会が少なくなり、指導がしづらかった。 △教員に対する言葉遣いや態度など継続的な指導が必要である。 △授業研究の時間が少なかった。
		授業研究と実践の工夫に取り組む。	B	
		他者への礼儀と思いやりを培わせる。	B	

2. 教育活動の目標と方策

	重点目標	目標達成の方策	評価	成果と課題 (○成果 △課題)
信条教育	(1)親神様、教祖にお喜びいただき、現代社会に必要な「道の後継者」を育てるべく、教職員自らが日々信仰実践に励むよう努力する。 (2)3年次に別席を選び、「おさづけの理」を拝読させていただき、4年次に積極的に「おさづけの理」を取り次ぎ、「よふぼく」の自覚を持たせるようにする。	学校・学寮研修会、つとめ先懇談会を通じて、学校・寮・つとめ先の連携の強化を図り、おちばに伏せこむ姿勢を培う。	C	○学年での定期参拝が再開できたことは良かった。 ○月次祭行事を通して、生徒共々おつとめに真剣に取り組んだ。 ○よふぼくとなった4年生が、下級生におさづけを取り次いでいる。 ○職員月次祭まなびに多くの先生方が参加し、陽気に勇んでつとめることができた。 △各学寮懇談会ができず、交流の機会が少なかった。 △大祭参拝を実施できず、大祭や月次祭に対しての姿勢を学ばせる機会が少なかった。 △生徒へ伏せこみについて懇々と伝えることができなかったように思う。
		教養科の授業の中で、「つとめ」の大切さを教え、大祭参拝・大祭行事・月次祭行事を通して報恩感謝の心の涵養を図る。	B	
		教職員自らが積極的に「おさづけ」の取り次ぎ、ひのきしんへの参加、職員月次祭まなびに参加し、信仰の実践に励む。	B	
学習指導	(1)生徒の能力・適性・生活条件に即した魅力ある教育課程の実施をめざす。	「わかる授業」の実践を目指して校外研修に参加したり、教科内での授業研修を行い、指導技術の向上をめざす。	B	○「基礎・基本の定着」が大切であることを常に意識し、教科の授業に取り組んでいる。 ○学期ごとに基礎講習を行い、基礎学力の定着を図った。 ○研究授業での反省を活かして授業展開や内容を工夫することができた。 △新学習指導要領およびGIGAスクール構想に向けて、ICT環境の整備を拡張し、教員の技術を向上させていく必要がある。 △校内模試を受けることが目的となっている面も見受けられ、継続的な学習習慣をつけさせる必要がある。
		基礎・基本の定着の徹底のため、各教科で、課題を与えたり講習を施したりする。また、「確かな学力」を育成するうえからも、「校内模試」の実施により、さらに学習意欲を高めるようつとめる。	B	
進路指導	(1)個々の生徒の希望進路を実現するために、本校の実情を踏まえた指導を行う。 (2)社会に出てからも通用する学力・教養を身につけさせる。	2年次の選択科目決定の際、自らの進路について、しっかりと考えさせる。	B	○2年生選択科目選択時において、進路に大きく関わることを意識付けさせ、自らの進路を真剣に考えさせながら指導することができた。 ○コロナ禍により、就職進学希望者ともに状況が様変わりする中で、学級担任及び進路指導部が中心となって指導を徹底することができた。 ○職員室内の生徒用検索PC、また学寮におけるPCが導入されるなど、生徒を取り巻く環境が非常に向上したと言える。生徒にとって進路情報が得やすくなり、生徒自身が進路に向き合える時間が増えた。 △卒業後の進路について、1年生の段階から積極的に考えるよう促す必要がある。 △コロナ禍の影響により、ZOOM等を用いたオンライン面接(WEB面接)を活用する企業が大幅に増えつつある中、オンライン面接に対する対策を十分に構築する必要がある。
		授業はもちろん、基礎講習・進学講習の充実を図り、全国レベルの模試も積極的に受けるように指導する。	B	
		進学先・就職先の情報をできるだけ多く提供する。	B	
人権教育	(1)「陽気世界」実現のために「天理教の教義」の実践を通し、あらゆる差別意識の変革をめざす。	研究大会、研修会・公開HR等に参加するなどの自己研鑽につとめる。	B	○日々の声掛けやいじめアンケートにより、いじめや差別を防止する行動を心がけることができた。 ○性の多様性、差別等の人権に関する研修や情報収集を積極的に行うことができた。 ○常に思いやりを忘れないよう自分自身も心がけ、生徒にも働きかけることができた。 ○生徒からLGBTに関する悩みを相談されたが、できる対策を一緒に考え、柔軟な対応を心がけた。 △研修会や研究大会等、担当教員に任せきりになっているところがある。 △性的マイノリティについての理解がまだ浅い。教員研修の充実や環境の整備が必要である。 △言葉遣いに関して、周りに配慮が足りない生徒がおり、今後も継続的に留意する必要がある。
		あらゆる教育活動において、人権に配慮した指導を行う。	B	
		生徒個々の様子や変化に気を配り、差別・いじめの防止につとめる。	B	
ひのきしん生指導	(1)4年間のおちばへの伏せこみを通して、よふぼくとしての自覚と自信を培い、お道の御用に、また、社会に貢献できる人材の育成をめざす。	「つとめ先訪問」を通して、つとめ先と学級担任との連絡を密にし生徒の育成に資する。	B	○「つとめ先訪問」を通してつとめ先との連携が取れ、生徒指導に役立った。 ○つとめ先との距離が近くなったように感じる。またつとめ先で起きた諸問題に対して、適切な対応をお願いすることができた。 ○生徒は4年間のつとめを通して自己肯定感や自尊心を高めている。 ○つとめ先との連携や共通認識を持つ取り組みを通し、勤務状況の改善が見られた。 △生徒の中で「つとめ」に対する意識が低くなって来ている感がある。 △つとめ先と学校との思いが違うときがあった。
		つとめ先で生じた生徒の諸問題に対し、つとめ先に適切な対応をお願いする。	B	
生徒指導	(基本的な生活習慣の確立と規範意識の向上) (1)社会に対応できる精神力と忍耐力のある人間の育成。 (2)信条教育に基づき、自己敬愛、公共の精神を育み、規範意識の向上を目指す。 (3)生活の実態やルール、マナーについての意識を高め、主体的に課題を見つけ、解決できるように支援する。	校内各分掌との連携を図り、教職員の共通理解・共通認識のもと生徒の指導に当たる。	B	○教育相談との連携を密にとり、生徒を多面的に見守ることができた。 ○生徒の様子を観察し、普段から何気ない会話をするようにできた。 ○教職員連携して規範意識を向上させる取り組みができた。 ○いじめに関するアンケートが、直接相談できない生徒の訴えの場になっていたり、問題行動の抑止や早期発見に一定の効果があると思われる。 ○いじめや暴力事象、上下関係のトラブルが減少した。 ○遅刻防止、制服の正しい着用に関する取り組みはできていないように思う。 ○生徒指導問題に関して、学年、生徒指導部、ひのきしん生指導部等、連携をはかることができた。また、つとめ先、教会、保護者との連絡を密にして連携を深めることができた。 ○下校指導は自転車のマナー向上や生徒の下校途中の安全やマナーの向上に一役買っている。 ○コロナ対策を行いながら、外部から講師を招いて防犯安全教育をおこなった。 ○カウンセリングというものへの先入観が無くなり、積極的にカウンセリングを受診する生徒が多くおり、一人一人の気持ちをより理解することができた。
		教職員を含め、学校全体で挨拶を励行する。	B	
		遅刻防止、制服の正しい着用を徹底する。	B	
		清掃や身の回りの整理整頓を徹底し、校内美化に努める。	B	
		登下校時の安全に努める。	B	
		自転車の点検と事故防止、交通ルール遵守とマナーの向上に努める。	B	
		事件・事故防止のため、関係機関による講演を実施する。	A	
		教育相談室と連携し、生徒一人ひとりに対する精神面の支援を行う。	B	
特別教育活動	(1)学校生活の充実をはかるために積極的に活動できる心豊かな生徒を育てる。 (2)部活動に積極的に取り組み、主体的に行動できる生徒を育てる。	行事を通して生徒の自主性を高め、達成感を得られる活動の工夫と充実を努める。	A	○コロナ禍で制限がある中で、充実した学校行事ができた。 ○それぞれの行事に積極的に参加し、クラス・学年を超えた仲間意識をもつなど、多くの達成感を得ることもできた。 ○部活動への入部率が高く、文科系・体育系を問わず、良い結果を残した。 △学校行事について見直しが必要である。
		活動の具体的な目標を明確にし、継続して努力させる。	A	
		活動を通して役割を自覚させ、責任感を培わせる。	A	
学級経営	(1)相互の受容と共感によって親密な人間関係を築く。 (2)各自が自分の役割を果たし協力してクラスに参画する自主的、実践的な態度を育てる。 (3)生徒一人ひとりに積極的に関わることによって生徒の個性を理解し、学級経営や生徒指導に活かす。	年間計画にもとづいて学級企画HRを実施し、クラスへの帰属意識と自尊感情を育てる。	B	○コロナ禍ではあったが、体育祭や文化祭などの学校行事やクラスでの役割を通して、生徒たちのクラスへの帰属意識や自尊心を育てることができた。 ○学校行事やクラスの役割を主体的に取り組む生徒の姿が多く見られた。 △業務が増え、時間的、人力的に余裕がなくなっている現状があり、クラス担任の負担が増大している。 △生徒・クラスに関わる時間をとるのが難しい状況である。 △特定の生徒に多くの時間をかけなければいけない状況がでてきている。 △精神的な問題を抱える生徒に対する対応について、今後どう対応していくかということが課題である。
		学級内の様々な役割を、各自が責任を持って果たすことにより、団結力のあるクラスに育てる。	B	
		個人面談を計画的、また必要に応じて随時行ない、生徒理解に努める。	B	
教育相談	(1)生徒指導部、ひのきしん生指導部、つとめ先、寮、保護者、教会などと連携しながら、生徒が成長できるよう支援を行う。 (2)生徒一人ひとりの自尊感情を高めるために、支持的・支援的な態度で接する。 (3)学級経営の充実と合わせて、生徒の心の健康を推進させる。 (4)職員研修を定期的実施し、教育相談に関する教師のスキルアップを図る。	一人ひとりの生徒について、担任を中心に生徒指導部、ひのきしん生指導部、つとめ先、寮、保護者、教会などと情報を共有し連携して支援する。	B	○生徒と積極的にコミュニケーションを取ることで、問題に対して、早急に対応することができた。 ○関係の先生方や寮の幹事さん、健康管理室のカウンセラーと連携し、支援することができた。 ○本人からよく話を聞き、支援を根気強く行うことができた。 ○適応障害と診断された生徒がいる中で、本人、関係する方と相談し、柔軟な対応を心がけた。 △公務多忙につき、生徒とのコミュニケーションが、なかなか取れない状況にある。 △精神不安定等で欠席を繰り返したり、一時帰省する生徒が大幅に増え、そのような生徒に対し時間が取られ過ぎることがある。予防的な取り組みを考える必要がある。 △学寮にも気軽に相談できるセッションが必要になってきている。 △寮職員が把握していないところで話が進んでいる場合があった。 △担任や学年の方針を中心とする取り組みがしづらかった。 △一貫した学校としての指導が徹底されていないように感じる。個人や学年による指導方法の変化による問題点がある。 △コロナの中で、心的ストレスを抱える生徒が多くなったように思われる。見えていない部分を含めて生徒個々の状況に応じての対応を拡充する必要がある。
		授業中、参拝時、休憩時、夕食休み、放課後などあらゆる時間において積極的に生徒とコミュニケーションを図る。またその際は褒めるなど支持的な声かけをする。	B	
		ホームルーム活動と個人的な支援を連携させながら生徒が元気に生活を送れるようにする。	B	
		教育相談に関する職員研修に参加し、理解を深める。	B	
学寮	(1)学校・寮・つとめ先の三位一体の生活のなかで、学校・つとめ先・保護者との連携を強化し、互い立て合い助け合う心を持って、生かされている喜びを素直に受けとる生徒を育てる。 (2)身上かきもの・かきもの自由のご守護に感謝し、進んで「朝起き・正直・働き」を実践させていただく生徒を育てる。	一人ひとりの生徒について、担任を中心に生徒指導部、ひのきしん生指導部、つとめ先、寮、保護者、教会などと情報を共有し連携して支援する。	B	○積極的に「おさづけ」の取り次ぎを実践した。 ○寮職員(幹事も含む)の連携を図り、生徒指導にあたることができた。 △コロナの陽性者対応により、医療従事者並みの対応となり人員の少なさが露呈した。 △コロナ禍で学校・学寮懇談会、研修会を中止せざるを得なかった。生活指導員として資質の向上に努めるため、研修、研鑽が必要である。 △新型コロナウイルス対策として、集団生活での三密の回避、寮行事等の見直しが必要となった。 △防犯の観点から、防犯カメラ等のセキュリティ強化が必要である。 △寮の耐震化等、生徒の安全確保を切実に感じる。
		学寮職員としてすすんでおさづけを取り次ぎ、おたすけを実行する。	A	
		保健部・教育相談室との連携を深め、精神面でのフォローを行い心身ともに健康的に寮生活が営めるよう支援する。	A	
		生活指導員としての研修を継続的にを行い、学寮職員としての資質を高める。	B	